

「好きを貫く」難くない

「どうやって食べていくのか」。芸術の道に進むことを決めたとき、周囲の人はそんな不安を感じ、反対の声もありました。そんなとき「それしかないと思うなら、とことんやってみたら」と背中を押してくれたのは母でした。

「絵を描いて食べていけるかどうか今でも不安に思うことはあるけど、食べていけるかどうかはやってみないと分からない。食べていくって決心してやってみるしかない。応援してくれる家族にすごく感謝しています」

八嶋さん夫婦は平成30年にドイツの都市ハノーファーに滞在し作品を制作していました。そのとき、日本とドイツの自分の好きなことや余暇に対する考え方の違いに驚いたのだそう。

「ドイツでは、自己実現、つまり好きなことをしたり、表現したりということ周りが寛容に受け入れてくれて、時間や余暇を自分や家族のために使い楽しむことをとても大切にしています。日本も社会全体がそんな雰囲気になっていけばいいよね。」

けばそれ自体が仕事・職業にもなるかもしれない。例えば、料理が好きでそれを突き詰めていけば料理家のような仕事にもなり得る。自分が好きなこと、夢中になれることを続けられる限り続けていけば、どんなに才能があっても続かないとそこで止まってしまう。続けていければ可能性は広がっていく」

田舎だからって諦めなくていい

「田舎だと選択肢が少ないことはある程度でしょうがないことだと思う。でも田舎には都会では経験できないことがたくさんある。人の魅力は、その人が育ってきた環境と経験によって形づくられるから、ここで経験できることは、かけがえないもの。」

それに移動も情報を手に入るのも便利な時代になったから、自分自身がやりたいと思ったことがあるなら、チャンスはどこにだってあるはず。やりたいことが分からないということもあるかもしれないけど、そんな時は、自分自身と向き合って、自分のこと、好きなことは何なのかをじっくり考えることが大事なんじゃないかな。

いかな。家族や大人はその可能性を狭めないように、いろんな選択肢を提示してあげられたら。

大人は子どもがやりたいことをやらせてあげる。応援してあげばこそ反対するっていうのは大人の持論であって、その子にとってマイナスになるかどうかなんて分からない。本当にやりたいと思ったことなら、大人から見たら危ない橋を渡ってることであつたとしても、まずは応援してあげたい」

私が描き続ける理由

洋平さんが描く作品にはよく人形が登場します。その人形には、人の感情が投影されています。

洋平さんは絵を描くことで「なぜ、その絵を描きたいと思ったのか。絵を通して自分の考えていること、伝えたいこと、感情を整理し、自分を理解して掘り下げて考える」のだと言います。

「人形に感情をのせる。幼少期になんとなく感じていたつらい思い、自分の中にそういう思いがあったから、こういうテーマで作品を描いています。アートとして見ればきれいだ

けど、僕からするとつらい記憶、描くこと自体がしんどい作業でもある。でも同じようなつらい気持ちを持っている人たちが共感し、『あ、その気持ち分かる』『この絵気になる』『絵を見てくれた人のそんな反応が楽しみ。見た人が何かを考えるきっかけになればと思っています』

新型コロナウイルス感染症の影響で、9月に開催予定だったニューヨークの個展は1年延期。さらに今年9月3月の間に予定していた、ドイツのケルンでの滞在制作も渡航許可が下りずどうなるか分からないようです。「難しい時期ではあるけれど、絵を通じてこれからも何かを伝えていきたい」

絵を描くことを通して自分を見つめ続けてきた八嶋洋平さん。だからこそ、自分を知ることの大切さを知っているのだと。

「自分を知ること」「好きなことを続けてみる」と。そしてそれを応援する家族が、大人たちが、地域があること。これは田舎の小さなコミュニティだからこそ実現できる身近な後押しのカタチかもしれない。その力はとても大きいはずだ。



ぼくたちの子どもは将来どんなことに興味を持つのかな。今から楽しみだね。

納得のいくまで描き続ける



令和元年7月。滞在制作先のドイツ・ハノーファーでの展覧会。多くの人が集まる。芸術と日常の近さに驚いた



紙パレット



学生の頃から使っているペインティングナイフ。絵の具を画面に乗せたり削ったりする



次の作品の構想を練る